

交わりを育てよう

ヨハネ第一 1:1-4

使徒 2:42 に「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」とあるように、「交わり」は、「使徒たちの教え」、「パン裂き」（今でいう聖餐式）、「祈り」とともに、教会になくてならないものとして守られてきました。ところが、この「交わり」とは何なのかということは、案外よく理解されていません。未信者の方にとってはよく分からないキリスト教用語の一つでしょうね。クリスチャンにとってもよく理解がなされていない場合があります。そのために、ほんとうの「交わり」を求めて教会にやってくる人たちを信仰者が、教会が失望させてしまうかも知れません。そうならないで教会に、聖書の教える「交わり」が築き上げられていくために、「交わり」について基本的なことを学んでおきたいと思います。

1) 神との交わり

「交わり」には、ふたつの面があります。ひとつは神との交わりで、もうひとつは神を信じるひとびと相互の交わりです。聖書は、神との交わりが先にあって、そこから神を信じるひとびとの互いの交わりが生まれると教えています。この順序は大切です。

「神との交わり」、それは神に愛され、神を愛することです。しかし、日本人の多くは「神との交わり」と言われてもピンと来ません。なぜなら日本の神々は、人々を愛することがなく、人々に愛されることも求めていないからです。天からの雨が田畑を潤し、地に実りをもたらす、人々はこの自然の営みを神々としてあがめました。しかし、自然はいつでも穏やかとはかぎりません。嵐が吹きあれることも、洪水になることも、日でりが続くこともあります。人々はそれを神々の怒りと考えました。そして、神々をなだめるために祭りをしました。地鎮祭がそうですね。ことば自体が土地の神様の怒りを鎮めると書きますからね。日本人の多くが信じる神々は怒りこそすれ、人々を愛することはありません。日本には昔から「さわらぬ神にたたりなし」ということわざがあって、お宮を建て、神々をそこに閉じ込めておけばそれでよいと考えていました。参拝と祭りを欠かさないことが「信心深い」ことであって、「神とまじわる」などというのは、怨霊や妖怪に取り憑かれる、恐ろしいことだと考えられてきたのです。こうした宗教的な背景のため、「人との交わり」はなんとなく分かっても、「神との交わり」についてはなかなか理解できないのかもしれない。

しかし、神が分からないのは、日本人にかぎったことではありません。神は人間を超えた存在ですから、人間のほうから神を知ることではできません。神のほうから、ご自分を示してくださってはいじめてできることなのです。そして、神は、ご自分を示すために、人となってこの世に来られました。それがイエス・キリスト、人となられた神です。

ヨハネの手紙は、キリストについて、「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて」（1節）と言っています。「ことば」とはキリストのことです。キリストは「初めから」おられたお方です。いつかあるときに誰かに造られたものではありません。すべてのものをお造りになったお方です。

神は永遠のお方、人間は限りある者。神は創造者、人間は被造物。神は聖なるお方、人間は罪ある存在。そのままでは、神と人間には接点も、共通点もありません。それで、キリストは人となることによって人間との接点と共通点を作ってくださいました。「私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの」とあるのは、人間がほんらいは見ることさえできない神が、見て、触れることのできる体を持った人間となられたことを言っています。

キリストが人となられる、それは簡単なことではありません。キリストがそこまでなされたのは、わたしたちへの愛のゆえでした。わたしたちは、このキリストの愛によって初めて神を知ることができました。神に愛されていることを知り、神を愛することを学んだのです。

2) 交わりの成長

イエス・キリストを信じてはじまった神との交わりは、成長し、深められていく必要があります。キリストはわたしたちに神との交わりを得させるためにこの世に来てくださいました。ですから、わたしたちがキリストを信じた後の生涯とは神との交わりを深めるためにあると言っても言い過ぎではないと思います。

では、神との交わりはどのようにして深めていけばよいのでしょうか。1節の「私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの」という言葉は、弟子たちが、最初、イエス・キリストについて聞き、次にイエスに出会い、さらにイエスをよく見、そしてイエスに触れていったという体験を語っています。「聞く、見る、じっと見る、手でさわる」という言葉は、イエス・キリストとの交わりが深められていくステップを表わしています。

キリストとの交わりは「聞く」ことから始まります。聖書を開いて、キリストの言葉に聞くのです。誰も、自分の好きな人の声を聞きたいと思います。若い人たちがひっきりなしに携帯電話で友だちと話しているのはそのためです。もし、イエス・キリストがわたしたちにとって最も愛すべきお方であるなら、その言葉に聞きたいと思うはずで、キリストは、きょうの箇所から何を語りかけてくださるのだろうかという期待をもって、聖書を開きましょう。キリストに聞くことから、キリストとの交わりをはじめましょう。次は「見る」ことですが、今は、イエス・キリストを肉眼で見ることはできません。しかし、信仰の目でイエスを見ることが出来ます。そうでなければ、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」(ヘブル12:2)といった言葉が意味をなさなくなります。「聞く」というのは「客観的な知識」を表わしますが、「見る」というのは、もっと「人格的な関係」を表わす言葉です。蜷池の教会はアメリカから来たバーソルド宣教師によって始まりました。60年近く前のことです。私は蜷池に来て初めてバーソルド先生のことを聞きました。先生については共におられた教会の方々から教えていただいたわけですが先生を知っている方々は生き生きと今、おられるかのように語って下さいます。それは先生と人格的な関係があるということを示しているのです。ですからキリストを「見る」、あるいは「出会う」とは、キリストを知識として知るだけでなく、キリストを人格と人格の関係で知ることなのです。聖書を読んでも知識として知っているだけでは自分の人生観、世界観に影響してくることはありません。客観的な知識は非人格的なものですからそれは空しい結果に終わることになります。聖書の学びから始まって聖書に教えられ導かれ、キリストをまごころから礼拝する中ではじめてできることなのです。三番目は「じっと見ること」です。アメリカ人やヨーロッパの人は人と話すとき、じっと相手の目を見ます。じっと相手の目を見て話すのは日本人には苦手なことです。私も幼い頃は対人恐怖症でしたので人の前に立つことだけでも怖く、さらにじっと目を見て話すということは不可能に近いこととっていました。しかし、いつの頃からかじっと目を見て話すということは関心をそこに向け、相手の話を真剣に聞いている態度を伝えることであると理解するに至りました。(今は例外的にカウンセリング等で話す時は相手が話しやすいように目を合わせないで聞きますが)「見る」とは「人格的な出会い」を意味しますが、「じっと見ること」は、そこからさらに進んで、出会った相手の「本質を知る」ことを意味します。福音書の中でキリストに出会った人は多くいます。しかしキリストに出会ったすべての人がキリストがどんなお方であるかを知ったわけではありません。キリストを「よく見」、「じっと見つめた」弟子たちだけが、「あなたこそ生ける神の子キリストです」という告白に至りました。キリストを「じっと見る」とは、キリストに思いを集中することを意味します。詩篇27:4に「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」とあります。キリストを「見つめる」とは、この詩篇のように、深く主を思い見、キリストと心と心を通わせあうことです。

最後の「触れる」というのはキリストの臨在に触れることを指します。いや、わたしたちがキリストの臨在に触れるというよりは、キリストの臨在がわたしたちに触れてくださるといったほうが正確でしょう。キリストは「見よ。わたしは、世の終りまで、いつも、あなたがたとともにいます」(マタイ 28:20)とされました。この言葉は、「わたしが一緒にいると思ってがんばりなさい」という励ましではありません。ほんとうにわたしたちと共にいてくださるという約束です。わたしたちは、苦しいとき、たとえ具体的に何かをしてもらえなくても、誰かが一緒にいてくれるだけで慰められることがあります。その人に自分の苦しみを話したからといって、解決がないことを知っていても、誰かに聞いてもらうと、心の重荷が軽くなります。誰かがそこにいてくれることが大きな力になるのなら、キリストの臨在はなおのことです。預言者イザヤは神の栄光を見たとき、ひれ伏し、震えおののきました。しかし、同時に恵み深い神に触れていただき、そこから立ち上がりました。そのようにわたしたちも、キリストの臨在の前に身をゆだねるとき、キリストがわたしたちに触れ、わたしたちを赦し、いやし、強めてくださるのを体験できるのです。

3) 相互の交わり

こうした神との交わりは、ひとりひとりの内面の中で行われるものですが、それは、その人の中だけでとどまらず、かならず外側に表われ、他の人にも伝えられていきます。3節に「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。」(3節)とある通りです。キリストの最初の弟子が次の弟子に伝え、その弟子がまた次の弟子に伝え、そのようにして、神との交わりは、世代から世代へと伝えられて、わたしたちにも伝えられたのです。そして、それを伝えられた人たち相互の間に共通したものが生まれました。それが、「交わり」のもうひとつの面、キリストを信じる者たち相互の交わりです。つまり私たちの交わりとは互いに仲良く親密になるということではなくキリストを知ることにおいて一つとなり互いに分かち合うということなのです。ですから誰かの証しを聞いて心励まされ、満たされるということが起きるのです。

ご存じのように「交わり」という言葉は、新約聖書が書かれたギリシャ語では「コイノニア」と言います。「共有する」とか「分かち合う」という意味です。ひとりひとりが神との交わりを持つとき、神を愛し、崇める者たちの間に一つのつながり、共同体が生まれます。これが教会です。共に賛美をささげ、御言葉を聞き、証しを分かち合うとき、お互いの心に共通した神への感謝や信頼、また、献身の思いが与えられます。それによってひとつに結ばれます。互いに「神さまは素晴らしいね」と、神を誉めあう。この交わりによって、わたしたちのたましいは満たされるのです。教会にはさまざまな人が集います。当然です。招いておられるのは神様ですから。けれども不思議な一致があります。イエス・キリストを信じ、神との交わりを持っているひとびとを結ぶ、共通のものがあるのです。どの人であっても共に神の子どもとして、父なる神をほめたたえ、神に信頼していきます。

教会はこうした交わりを育てるところです。わたしたちひとりひとりの神との交わりも、ここで育てられます。最初は受けるばかりであった人が交わりを育てる者へと成長してゆきます。そして教会はこの交わりを多くの人々に広めていきます。この交わりを育てるためにわたしたちに何ができるでしょうか？ もっとキリストとの交わりを深めることでしょうか？ もっと証しを分かち合うことでしょうか？

素晴らしい記録を残した野球選手が「何か日ごろから心がけていることはありますか？」とインタビューで聞かれてこう答えました。「私の選手生活のモットーは練習はうそをつかないということです」愚直に聖書に親しみ、キリストとの交わりを深め、神様のご臨在を体験してゆくこと、また自分自身に主がなして下さったことを大きくすることもなく、また小さくすることもなく正直に分かち合ってゆくこと、証ししてゆく特に交わりは成長してゆきます。ぜひ皆で教会の交わりを育ててまいりましょう。